

サロン・あべの

<サロン・あべの>NO. 23 昭和63年 5月21日(土) 発行

<サロン・あべの>4月の出会い

昭和63年4月16日

地域福祉―育て草の根

生駒市市会議員として 三期十二年にわたって、活躍してこられた、西 勝彦氏に四月の出会いの、パネラーをお願いしました。ご自身の障害者としての気持と、行政側からみたお話、そして風刺もまじえての熱弁に二十六名の参加者は、自分たちの住む地域福祉を改めて見直す気持を呼びさまされました。

国障年で、なにやったかな

一九八一年から国際障害者年が始まったが、これは国連の第三回総会で、全世界的な規模での事業として開こうと、発表したものである。地球的なイベントということで、日本でも大きな予算が組まれ、障害者がクローズアップされ、「完全な社会参加」「住みよい街づくり」と鳴物入りで出発した。

大さわぎはしたが、いまもって安定した生活、就職問題、街づくりなどは遅々として進展していない。これは日本だけでなく、

他国も同様、改善されていないのが現状で、手つかずでしりすほみになるケースもまゝ見られる。これでもわかるように行政は、働きかけがなければならない。インシャーティブを障害者自身がとらないといけないのである。

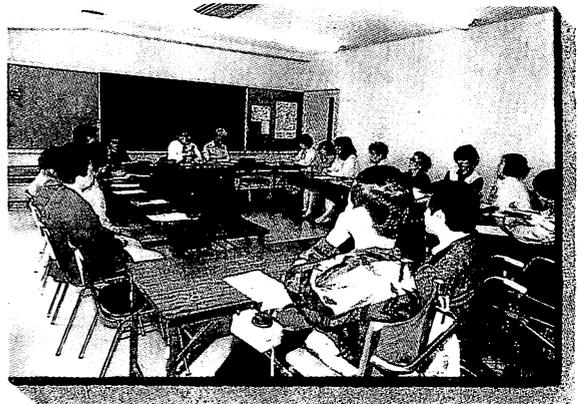
いわなあかん

国障年だからやるだろう、あるいは行政が、福祉施策がしてくれるだろう、いつの日かよくなる…と行政責任を待つばかりでは、障害者が住みよい街・生活環境は改善

もされないし、進歩もない。障害者だって生きてゆく権利があり、生きてゆかねばならない義務もあることを再認識して、人まかせにしないで、障害者自身が自分たちの生活の改善を求めて一定の考えをもち、活動をしてゆくことが大切なのである。

たとえば、道路の場合、松葉杖が滑るところがあったり、段差で車イスが通れなかったり、点字ブロックが不備だったり、快適な生活・安心な歩行が出来ない。駅にしても、大半が頂上駅で、ホームへ行くには大へんである。横断歩道も陸橋に変わった。こういったことは、いずれも障害者無視の極、といっても過言ではなからう。こうして一旦出来上ったものを、ここが悪いあそこが不備といつて簡単にこわしたり、手直しすることは実際問題出来にくい。費用の無駄でもある。だからといって、手をこまねいては駄目で、常に現場の点検を可能な限りの改善要求は怠ってはならない。これ以上にもっと大切なことは事前に、計画段階で、障害者が街づくりの中に参加することである。

障害者も使える駅、障害者も安心して通える道、見た目ばかりのものではなく、ほ



んとくに障害者に使い勝手がよく生活しやすい街づくり運動(提言)を障害者自身が積極的に問題提起して行く必要があると思う。障害者が住みよい街であれば健常者には、よりもっと快適なはずである。

書いたもん、わたすこと

既存のもの、あるいは計画段階のものを問わず、改善してほしい箇所、要望事項があれば、障害者自身が調査点検して、口頭や電話によらずに、必ず文書にして、具申

するようになれば、その案件が成功するか否かは別にして、行政としては、それを取り上げて検討・討議しなければならぬ。何故このような要望をするか、これでどれだけ住みやすくなるのか、使いやすくなるかも併せて明記しておけば、よしんば今回廃棄になったとしてもあとあとの布石になる可能性が残る。

常に貧欲に現実をみつめ積極的に働きかけ、提言する姿勢を忘れてはならない。

講演のあと、原田仁氏の司会で、参加者みんな、身近かで「なんとかしてほしい」ところを話合った。

なんとかしてエくな

この日参加の方々からなんとかならへんかと出されたことのかずかず。

●駐輪

ひとたび災害が起ったときのことを思えばゾットする。

●歩道の段差

車イス・目の不自由な人 どちらに合
わせるかでなく、両者が使える段差を、
あるいは方法を。

●JRのホームと列車の段違い

ベニヤ製の橋をかけてくれる、うれし
い駅があるが、これも一部だけ。

●地下鉄のホームと車両の段差

ある程度の乗客重量を、加味してある
ので、ラッシュ時はホームとの段差は
ないが、すいているときの車両は、ホ
ームより上になる。満員のときは乗れ
ない、すいているときは段差で乗れな

い。いつ車イスが乗ればいいのでしょ
う？

●阿倍野区役所

・スロープのたがたに車イスの車輪
が挟まって困るんです。

・車イスも使える、受付カウンターの
高さを考えて。

・駐車場の奥行が浅く、車種によって
は、後輪が点字ブロックの上に来て
歩行のじゃま。

●天王寺の陸橋

どこの陸橋もいっしょですが、スロー
プがないのでね。視覚障害者用にと

つけられた手摺は握れません。もうひ
とつの手摺がつかえてね。

●図書館

車イスの人はわざわざ階段のある館へ
来ずとも、郵送借出しシステムを使われ
ては…という。開架式って、読みたい
本を、自由に見て、選べることで…。

まだまだ、たくさんあると思います。

人がちがえば、視点も変わります。チェック
して、少しでも、よりよい地域になればと
願います。

地域福祉の草の根

富田 慶子

西氏は、障害者にとつての地域福祉とは、
どんなものであるかということをご自分の
体験から、具体例を上げて解りやすく話を
して下さいましたので、後の話合いがスム
ーズに入れました。日頃感じていた小さな
不便が、自分一人だけのことではないこと
が解ってきたり、平常時の安全と災害時の
安全を併せて、常に考えておかねばいけな

い事等話合いの中から色々出てきました。
日頃ウカウカと過ごしている身には、耳
の痛い内容でもありました。障害者にとつ
て住んでいる地域が、どれだけの不便さ
・不自由さを持っているかを調査・確認を
しないでとやかく言うのはいけないこの
と。まず、裏付けを取ることが必要で、そ
の手始めとしてやりやすいのは、公共的機
関。一番身近で、かつ必然的な所であるか
ら、調査もしやすいと言うことでした。障
害者自身が自分達のために、自分達の手で
住みよい街造り、環境造りをしていかな

てはいけないと感じました。しかし、言葉
で解っていても外へ出ていかなければ具体
的に、何が不便で、何が不自由であるかが
解らないのですから、障害者は積極的に行
動範囲を拡げていくことが大切であり、日
頃外出されている障害者の方々には、プロ
ンティア精神をもって行動していただきた
いと思えました。たとえ、小さな声であつ
ても、草の根としての大きな課題を持つて
の行動であれば、その根はいつか地域に根
付いていくのではないかと、今日の課題の
重みを感じつつお話を伺いました。

自立

(7)

中西利香さんに、毎日の生活、将来の希望などについて、話を伺いながら障害者の自立を併せて考えてみたいと思います。

お母さんのベスト編んだよ

—前号の「スキーと私」の三時間かかってすべり降りた…。くだりを読んで感激したという話を聞きましたね。私もほんとうの中西さんが、そこにあると思います。

そこでお約束どおり今回は中西利香さんの生活ぶりや将来の希望などの話から障害者の自立を考えてみたいと思います。

まして。今日は忙しいのご足労かけました。

—さっそくですが、毎日をどのように過ごしていますか。

いろいろ習っています。火曜日に「ニッテングサロン友」で、手編物でしょ、木曜日は、市立身障者団体協議会でフープロ、金曜日は、長居のスポーツセンターで、エアロビクスを習っています。

—すごい！ 目いっぱい、青春していますね。で、その他の日は、おとなしくしているわけですか。

ええ、他の日もつまっていますよ。土曜日はサロン・あべのに出て来るし、月曜日は

お料理の練習しています。それに水曜日は浅香山で手作りの店の販売のアルバイトをして稼いでいます。

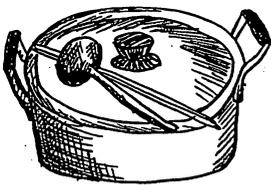
—そう、忙しいのね。お料理は、花嫁修業やね。お得意のメニューは何？

カレーライスとか、いり玉子。他は難しくて。

—ご飯がたけて、カレーが作れば、応用で何でも作れるわよ。すごいよ。たいたものよ。

色々と習っているけど、一番メインにしているのは、なんですか。

編物です。講師の免許とれるまでガンバロウと思っています。



—初めて編んだ作品は。

お母さんのベスト。直線だけで編めるVネックのごく普通のメリヤス編みで作りました。

—フクトク銀行での作品展に出して、好評だった、あれ？ 出来上がった時のお母さんの感想はどうでしたか？

ビックリしました。ここまで出来るとは、すごく喜んでくれました。

でも、ちょっと地味すぎたみたい。茶色の糸だったので。



—編物の勉強の内容とか苦労していることなど...

採寸したり、製図を起して目段数決めたりデザイン考えたりするのを習ってます。

苦労しているのは、まとめの目を拾う時とか、ゴム編み止めなど。なかなか出来ないで、早く出来るようになりたいです。今は、縄編のベストを習っていますが、これがまた難しくて。

—縄編みは、難しいね。どんな色？

私のベスト、グレー、もうすぐ出来上がります。

—それから、今迄どんな作品を編んできたの。

私のセーターとかカーディガンとか、ベストとか、三年間習って五枚の作品が出来ました。

—それらを編むのに何日位かかるの。丸首で、模様編み込みのセーターで半年かかりました。

今度、五月九日～十四日迄青徳ギャラリー

で展示会をするのですが、そこへ出します。—教室の人も全員出品されるのですね。

何人位仲間がいるの。

十四～五人です。一人最低一点以上出すことになっていきます。

—展示作品数が多くなるでしょうね。

準備が大変でしょうが、ガンバッテ下さい。盛会を祈っています。観せてもらうの楽しみにしています。

まだまだ聞きたいことがあるのですが次の機会にします。

今日はどうも、ありがとございました。(インタビュアー 富田慶子)

おしらせ

日時 昭和六三年六月十八日(土)

午後一時～四時

場所 育徳コミュニティセンター

二階研修室(西口、車庫あり)

「大阪市阿倍野区阪南町5-15-28

地下鉄西田辺駅北西五分」

内容 「私のストレス解消法」

(手話通訳有り)

パネラー 大島 功 氏

齊藤 孝文 氏 他。

会費 な し(カンパ大歓迎)

問い合わせ先 Ⅷ〇六一六九一―一〇二八

(富田慶子)

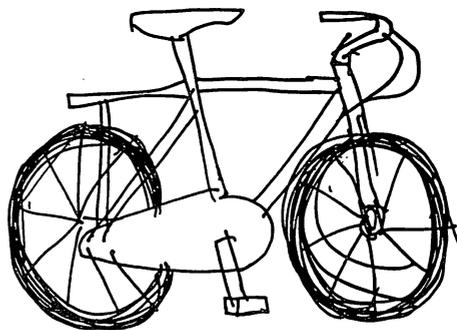
日々のよろこび添えて

ハサロン・あべのVに贈る「灯」

三月のカンパ合計四〇〇〇円

ありがとございました。

中学三年のころ



から近い生徒は試験に有利だと羨望視されるほどだった。

ぼくは、教科書を学校まで取りにいじめに、あわてて自転車に乗った。いまごろは必死になって勉強しているだろう競争相手の姿を目の前に浮かべては口惜しさに胸がいっぱいになって、ますますペダルを速めたのである。

息をはずませながら、しんと静まりかえった校舎に飛び込むと、夕やけの弱い光が廊下を鉄さびのような鈍い赤い色でおおっていた。

すっかり暗くなってしまった教室の前をいくつも通りすぎると、ぼくは自分のクラスの前で、七、八人の男女の生徒が教室の隅で、ひとつの机を囲むように立っていた。

ぼくは中学三年のとき見たあの光景がいまも忘れられない。

それは夕日も沈みかけた初秋のひとときのこと。自宅に帰って、あと数日に近づいた定期テストの準備をしようとすると、ぼくは不覚にも教科書を学校の机のなかに忘れてきてしまったことに気がついたのだ。

そのころのぼくの地域は、高校の入学試験は半ば形式的なもので、どこかの高校に入る事ができるかという事は、すべて中学三年生のときの定期テストの結果にかかっていた。そのため、定期テストの日が迫ってくると、ぼくのような「ガリ勉」たちは、先を争って自宅に帰った。家が学校

ないらしい。

生徒たちは、黙って真剣に彼女の答えを待っているようだ。ぼくは、その彼等の真剣な横顔に驚いていた。彼等はみんな、いわゆる「落ちこぼれ」の生徒たちだった。授業中は騒いでいたり無気力に眠っていたりしていたのである。試験前になると彼等もあわてているんだらうなと、なんだか少し可笑しかった。

ぼくは黙って、少しニヤニヤしながら教室の反対側の隅で、待っていた。忘れていた教科書は手にもっているし、もう帰って来た教科書は手にもっているし、もう帰って来た教科書は、ぼくはクラスで一番できるだ。理科は、先生の代わりにモーターの問題の解き方を授業中説明したこともある。いまMさんが必死になって解こうとしている問題くらい、ぼくが見ればすぐ解けるはずだし、それはクラスの誰もが認めていることなのだ。だから待っていた。彼女を取り囲んでいる生徒たちは、きつとモタモタしている彼女にしびれを切らして、ぼくに「教えてくれ」と頼むにちがいないと思っていた。そうして、何分かつたと思うのだが、

彼女は一生懸命考えていた。あんまり一生懸命だったので、ぼくが教室に入ってきたのにも気づいていないらしい。彼女を取り囲んでいる七、八人の生徒たちの何人かはぼくに気がついていた。ちらっとぼくの方を向いたが、何も言わなかった。教室には、自問自答するようなM子さんの声だけが響いていた。彼女はどうかや問題が解け

いつまでたっても誰もぼくの方を振りかえりはしなかった。まんなかにいるMさんは、前何度かぼくに「教えてくれ」と

「解き方」をまくしたてるか、あるいは「教科書の何ページを読んだらわかる」と言い捨てて、走って家に帰っていた。みんな、そうしていたからだ。そうしないと「いい高校」には行けないと思っていたからだ。

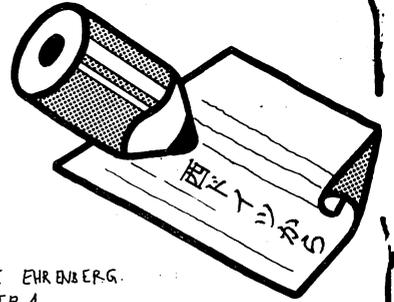
ぼくは、物音をたてないように、そっと教室を出た。わからないことだらけだった。なぜ、彼等はぼくに聞かなかつたのか。ぼくに聞けばすぐ答えがわかると知っているくせに、なぜ聞かないのだろう。彼等をいまままで振り払うようにしてきたからか。しかし、それは誰もがやっていることではないか。授業中真剣に聞いている彼等の責任ではないか。

いや、それよりももっとわからないのは、なぜ放課後遅くまで残って、あの子は教えているのか。成績だって、まんなかより少しくらいいいじゃないか。

ぼくは、Mさんを「ええかつこしい」なのだ」と結論した。そして、七、八人の彼女を取り囲んでいたクラスメートたちを「つまらない意地を張って損をした連中」と決めつけた。

しかし、しばらく待っても誰も声をかけてくれず、黙って教室を出たときに感じたあの孤独感が忘れられない。夕日は沈み、暗がりにおおわれた廊下をひとり帰った思いは、いつまでも記憶に焼きついて離れなかつたのである。

(知)



BRIGITTE EHREBERG.
DÜRERSTR. 1
4750 UNNA / WEST-GERMANY

Unna, 27th March 1978

Dear Mrs. Keiko Tomita,
my name is Brigitte Ehrenberg and I'm a member of a self-help-group for paraplegic patients in Unna, West-Germany. I'm getting to know Mr. Tomofumi Oka on his visit here and he sends me your address. I must write to you in English, because I don't speak Japanese. I hope you can understand me or you know someone who can translate this letter. Another problem is my handwriting. Because of my stroke the right side of my body is paralysed and so I've to learn writing again in my life. But I hope you can read my handwriting. Further I'm not able to produce such nice presents mad of your group. Thank you very much for your gift. I'm sorry, but ~~the~~ members of my group are ~~off~~ paralysed, too, so we can't make such work. If you are interested I write more about my group members in a next letter. I wish much success to you and your group and perhaps you've time and fun to write me a letter too.

Yours very truly
Brigitte

親愛なるサロンの皆様

私の名前は、ブリギッテ・オーレンベルグです。私は、西ドイツのウーナの卒中患者の自助グループのメンバーです。

私は、ここを訪問した岡知史氏と知り合うようになり、そちらの住所を知らされました。

私は、日本語をしゃべれないので、英語でしか書くことができません。

翻訳できる人があればと望んでいます。

他の問題は、私の手書きです。なぜなら私は右半身マヒの筆法です。それで、人生

でもう一度、書き方を習得しました。

そちらで私の手書きを読むことができればと望んでいます。

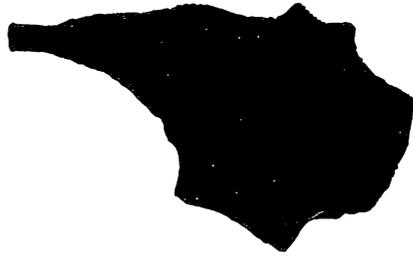
そちらで、もっと興味をもたれたら、次の手紙で私のグループのメンバーについて書きます。

あなたのグループの成功と、私に手紙を書く時間と喜びが得られますように。敬具

ブリギッテ

*岡知史氏がこの春、訪独されたとき、

ブリギッテさんにハサロン・あべのVのことを話してこられました。その返事が今日届きました。これから、ハサロン・あべのVのペンパルとして、交流を深めていきたいと思っています。



ニットینگサロン「友」
「十周年記念*作品展*」

ニットینگサロン「友」が編物を通して、障害者の社会参加と、健全者との交流を目的に開校して、十年になる。この節目に同教室では「十周年記念作品展」を育徳コミュニティセンターのギャラリー「い



編集後記

サロン・あべのはいよいよ3年生。今年度は「ストレス」を中心にいろいろな出会いを考えています。因みに・5月 ストレスって、なんやろ ・6月 私のストレス解消法 ・7月 住環境の工夫(予定) ・8月 あべのカーニバル出店参加 ・9月 見学会(予定) ・10月 簡易野球(予定) ・11月 ボランティア交流会(予定) ・12月 クリスマスの集い ・1月 新年会 ・2月 ストレスのまとめ ・3月 ふれあい広場を予定していますので、今年のサロンの合い言葉「おいでよ、おいで。みんなの笑顔に会えるんだ。」に乗って若葉印から元気印になったサロンへ… (石)
4月のサロンへ天田様、金子様、鈴木様よりお茶受けを、関本様より切手のご寄贈をいただきました。ありがとうございました。

くとく」で開いた。

五月九日〜十四日の会期中、たくさんの方が訪れ、すばらしい作品に、うっとりしたのはいうまでもないが、この作品展には他にない、もうひとつのすばらしいものがあった。それは作品出展者ひとりひとりのコメントがつけられていることである。コメントが観る人に、話しかけてくれるので、面識のない作者とも心が通よい合え、観る作品のあたゝかさ、すばらしさが増幅され、なかなかの演出であった。

(〇)

<サロン・あべの>第23号

発行日 昭和63年 5月21日(土)
発行・編集<サロン・あべの>運営委員会
[大阪市阿倍野区阪南町6-3-26
電話(06)691-1028福田慶子]
印刷 セルフ社 電話(06)652-0337
[阿倍野区阿倍野筋4-18-19]
定価 ¥60.